

論文要旨

【目的】若年女性の健康は、現在だけでなく、また将来の健康だけでなく、次世代の健康にも影響を与える。女性は、思春期から妊娠・出産期を含む性成熟期、更年期に至るまで、生涯を通して心身ともに大きな変化を遂げる。しかし、男性中心の消費主義社会では、望まれる女性像として今現在の外見が重視され、それに沿うような情報やサービスが提供され、将来の生き方について主体的に意思決定できないことを助長するような環境があると考えられる。そのような状況が、若年女性の情報の関心と、将来を見通した健康に関する知識不足や健康行動がとれないことと関連していないかを明らかにすることとした。

【方法】2015年9月、横断的自記式質問紙法によりウェブモニター調査を行った。20歳から35歳までの非婚女性423名を分析対象とした。自身の身体特性よりも外見に重きを置く現象を「自己対象化」(下位尺度「自己の監視」、「身体の羞恥」)という概念を用いて測定し、将来の結婚と出産の意思決定の明確か否かの「ライフコース」、将来の自身の健康と子どもの健康を見通した「健康影響の知識」の量、食事、運動、喫煙、飲酒、睡眠習慣、体重管理、暴力相談場所の認知、健康診断、子宮頸がん検診受診の9項目を含む将来を見通した「健康行動」、「健康情報の関心」、「外見情報の関心」との関連を検討した。分析には、統計解析ソフトSPSS Ver.22 及び Amos Ver.22 を使用した。なお、本研究は聖路加国際大学倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号：15-025)。

【結果】共分散構造分析の結果、「自己の監視」から「身体の羞恥」へのパス係数は.24($p<.001$)、「身体の羞恥」から健康行動へのパス係数は-.11($p<.05$)であった。自己の監視が高いほど身体の羞恥は高く、健康行動がとれていなかった。一方で、「ライフコース」から「健康影響の知識」へのパス係数は.09($p<.05$)、「健康影響の知識」から「健康行動」へのパス係数は.15($p<.01$)であった。ライフコースが明確な者はより健康影響の知識を有し、健康行動をとることができていた。また、「健康情報の関心」と「外見情報の関心」のパス係数は.62($p<.001$)であり、強い相関関係が認められた(適合度指標：GFI=.951、AGFI=.910、CFI=.933、RMSEA=.073)。

【結論】外見情報に高い関心を持つ者は、健康情報にも高い関心があった。自身や子どもの健康についての知識や行動を取り入れてもらうためには、外見に関する情報に、必要な健康に関する知識が身に付き、健康行動につながるような情報を合わせて提供する、という方策が考えられた。